

福祉研究のアウトカム指標としての国際生活機能分類(ICF)の現状について

○ 国立保健医療科学院 氏名 高橋 秀人 (008634)

大冢賀政昭 (国立保健医療科学院・006668)

森山葉子 (国立保健医療科学院・008635)

重田史恵 (東洋大学, 筑波大学・007279)

キーワード：根拠に基づく福祉(EBW), アウトカム指標, 生活機能分類(ICF)

1. 研究目的

本邦において「福祉」に関する研究は、福祉領域のケア/サービスの評価に関する研究の量的な側面から十分に実施されていない状況があり、アウトカム指標がはっきりしないこともあってエビデンスが十分に蓄積されているとは言いがたい。福祉政策や社会保障改革等において、政策のための根拠が求められており、根拠がより提供されやすい環境が必須である。これに関し、生活機能分類(International Classification of Functioning and disability and health:以下 ICF)は2001年5月にWHO総会で採択された「健康の構成要素に関する分類」であり、特定の人々のためのものというより、WHOの定義における「健康」を「生活機能」の相互作用を通し、環境因子や個人因子などの要因を含め、一般の人を対象に測定できうる指標と考えられ、福祉研究におけるアウトカム指標として有用な指標と考えることができる。本研究はICFを「福祉研究」のアウトカム指標としてどの程度用いられているかを調べることにより、アウトカム指標として用いるための検討を行うことが目的である。

2. 研究の視点および方法

(1) ICFの考え方

ICFは、人の「健康状態」を「心身機能・身体構造」、歩行や日常生活動作等の「活動」、地域活動などの「参加」の3つの次元で構成される「生活機能」及び、環境因子及び個性としての個人因子が互いに影響し合っていると捉える。これらをもとにした項目数は1500を超え、使いやすい形態、使いやすい項目数に関する検討が進んでいる。ここで、「心身機能」とは「身体系の生理的機能(心理的機能を含む)」、「身体構造」とは「器官、肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分」、「活動」とは「課題や行為の個人による遂行」、「参加」とは「生活・人生場面への関わり」、「環境因子」とは「人々が生活し、人生を送っている物的・社会的・態度的環境、つまり福祉用具、建築等物理的要素、家族友人等人的要素、制度、サービス等社会的要素など」、「個人因子」とは「個人の人生や生活の特別な背景年齢、性別、価値観、ライフスタイル、等」であるとされる¹⁾。

(2) ICFの活用

ICFの活用については、a)統計ツール(データ収集、記録(例：人口統計、実態調査、管理情報システム)), b)研究ツール(結果の測定、QOLや環境因子の測定), c)臨床ツール(ニーズの評

価, 特定の健康状態における治療法とその対応, 職業評価, リハビリテーション上の評価, 結果の評価), d) 社会政策ツール(社会保障計画, 補償制度, 政策の立案と実施), e) 教育ツール(カリキュラムの立案, 市民啓発ソーシャルアクション)などの可能性が挙げられている².

(3) 本邦における ICF を用いた研究の現状

論文検索エンジン PUBMED において, 全文検索「International classification of disease」かつ要旨検索「ICF」かつレビュー論文でない(「not review」)かつ全文検索「Japan」で検索された 20 件について, ICF がどのように用いられているかを提示する

3. 倫理的配慮

本研究は, ヒトを対象とする研究に関わる各種指針には該当せず, インフォームトコンセント, 倫理審査の対象となる研究に該当しない. また本報告は H30 年度厚生労働統計協会調査研究事業「国際生活機能分類 (ICF) の普及・活用の促進に関する諸外国の工夫の探索研究」を受けて実施するものである. また本研究は, 研究の全過程, 成果の公表において『日本社会福祉学会研究倫理指針*』を順守する.

* : <http://www.jssw.jp/conf/64/ethics.html>

4. 研究結果

ICF をアウトカム指標として用いた研究が 1 件, ICF の概念をアウトカム指標あるいは説明変数に用いた研究が 3 件, ICF の導入, 評価, 試用, モデル構築に関する研究が 16 件であった. 著者別に見た場合(論文は複数著者であるので合計は 20 以上になる), 3 論文執筆 2 人, 2 論文執筆 6 人(合計 113 人)となった.

5. 考察

Review した 20 論文において, ICF をアウトカムに用いた研究は 1 論文, ICF の概念をアウトカム指標あるいは説明変数に用いた研究が 3 件にとどまっていた. ICF はエレメントレベルでは項目数は 1500 を超えており, 使いやすい形態, 使いやすい項目数に関する検討が進んでいるが, まだまだ十分使用されていないこと, 重複論文発表者が 3 人と少ないことなど, ICF はよりアウトカム指標としても使いやすい形態を整え, 共有する必要があると考える.

文献

1. 文部科学省 ICF について

www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/032/siryo/06091306/002.htm (2018 年 5 月 8 日アクセス)

2. 世界保健機関 (障害者福祉研究会 編集). ICF 国際生活機能分類—国際障害分類改定版. (2002) 中央法規出版